

今学期、北九州 YMCA での実習を経験し、そのためにも多くの経験ができた。これから、前期と後期の実習において、感じたことの変化を述べる。

## 前期

- ・授業の楽しさと分かりやすさ。
- ・役に立つものであると学習者自身が実感できるもの。
- ・学習者が参加しやすい環境を作ること。

## 後期

- ・授業の楽しさと分かりやすさをどう実現するか。
- ・どうすれば役に立つものであると学習者自身が実感できるものになるのか。
- ・学習者が参加しやすい環境はどうやって作るのか。

上で述べたように、日本語を教えるにあたって重要なことは変わらないが、それをどうやって実現するかが後期の実習を終えた今大切だと考える。こう考えた理由を1つずつ説明していく。

1つ目、授業の楽しさと分かりやすさをどのようにして実現するか。前期では授業の楽しさと分かりやすさという、授業自体のことを言っていたが、その授業をどう作るかを考えた。授業の楽しさは、学習者自身が考え、発信すること、教師自身も楽しむことだと思う。教師自身が授業を楽しむことで場の雰囲気も明るくなり、学習者も楽しんで授業を受けることができるだろう。また、分かりやすいことも楽しい授業のための1つだろう。その分かりやすさは、教材を分かりやすく色分けや、大きめの声で話すような工夫で実現できる。さらに、初級の学習者であれば、分かる簡単な言葉を使うこと。どのくらい日本語ができるのかにかかわらず、分からない言葉があるときには絵や写真を使うことで、学習者は理解がしやすくなるだろう。口で伝えても分かりにくいことや、説明が難しいことがある場合、視覚情報としての教材は大切な役目を果たしてくれる。楽しくて分かりやすい授業をするためには、どんな質問があるか予想しながら、授業内容を事前に調べ必要な教材を準備しておくことが必要だと感じた。

2つ目は、どうすれば役に立つものであると学習者自身が実感できるかだ。授業を普通に受けていても、自分に役立つことかどうかを気づくことは難しいのではないだろうか。そこで大切なのは、自分が今何を知らなくて、何を学んでいるかを知ることだと思う。学習者が知っていることは簡単に復習というような形か、難易度を上げて行い、初めて学ぶことはしっかりと絵や写真、文字カードなど視覚情報を利用したやり方がいいのではないかと思った。

3つ目の、学習者が参加しやすい環境を作るということ。この環境を作るためには、3つ必要だと思う。それは「教師が、元気に授業すること」「メリハリのある授業をすること」「学習者の発言に対し、教師が反応すること」だと考える。教師が元気に授業をすること

は、その場を明るくし、学習者も一緒に明るい授業を作ってくれる。学習者は、教師が暗いと、一緒に暗くなってしまうと思う。メリハリのある授業をすることは、授業がだらだらとしていると学習者もだらけてしまい、授業に参加するというのではなく、そこに座っているだけという状況になってしまう。こうなってしまうと学習者は授業についていけなくなり、ずっと授業で座っているだけになる。これは悪循環である。学習者の発言に対し、教師が反応することは、学習者と教師のコミュニケーションであり、いわゆるフィードバックである。フィードバックは学習者が合っているか、間違っているか分かりやすいようにすることが必要である。これらの3つは、授業での学習者の学びやすさ、教師の授業のしやすさに関連しており、さらには学習者の学習意欲に関係してくると考えられるので、日本語を教えるにあたって重要なことだと思った。

次に、今学期での戸惑いや苦しみについて述べる。初級の学習者を相手に授業したので、前期の実習とは違い、説明で使える言葉が少なく、学習者の分からないという顔にどう対応していればいいのか分からず困惑してしまった。答え合わせで学習者が間違えてしまったり、正解の答えが出ても分からないという顔をしていたりするのを見ると、どうしたらいいのか分からず固まってしまう。私が授業をした時は、分からないという顔をした学習者の周りの学習者が説明をしてくれたが、その時教師はどう対応すべきなのか。その後、説明できるように説明を教案の留意点に書き、多めに教材を準備するようにした。例えば、「それに」「それで」の説明をするために絵カードを準備した。しかし、学習者が理解していたため使用することがなかった。最後の授業では、交通標識などの標識についてしたので、難しい言葉も含まれており、それを説明できるように絵カードや説明のための文字カードを作成し、持って行った。それを持っていくことで説明を何とかすることが出来た。また言動面では、私は最初の実習で、教科書の問題の答え合わせを担当した。その時、指名した学習者が間違えてしまい、他の学習者が発言をした時に、私の中ではもう1回間違えた学習者に言ってほしくて「何ですか？」と聞いたのだが、きちんと通じてなくて「何もないです」と言われてしまい、戸惑った。この経験を受けて、次からは、合っている答えだと分かったときは何も言わずに、発言した学習者の方を向いて「そうですね」と言うか、間違えた学習者が他の学習者の発言を聞いて、言い直してもらい、答えを出すようにした。また、聞こえなかったときは「もう一度お願いします」と言おうと思った。私はフィードバックが苦手だから、合っているときには「そうですね」「いいですね」というように心がけ、間違えたときのフィードバックは難しく、黙ってしまい、周りの学習者の発言に頼ってしまったからである。

今学期で行った、「教案作成」では時間をどう配分するか、どの言葉を使えばわかりやすいか、どういう教材がいいか、教材をどのように使うか、を迷った。教案作成は回数を重ねていくごとに必要な教材やどんなことをどこに書いておくのがいいのかなど分かり、進歩したと思った。「教材準備」では、文字や絵の大きさ、書き方、絵のチョイスでたくさん考えた。しかし、上手にできたときは嬉しかった。「マイクロ・ティーチング」では、1番

最初の時、とても緊張したが、2回目、3回目は緊張が少なくなった。何度マイクロ・ティーチングを行っても、発音やイントネーションは難しかった。最後に「北九州 YMCA での教壇実習」では、まず進歩したと思えることは、学習者へのフィードバックの仕方であった。フィードバックは意識して何回もするうちに、最後の授業では「そうですね」とすらっと出るようになった。時間配分では、最後の授業では最後微妙に時間が余ってしまってどうしたらいいかわからず、とりあえず読ませるような形になってしまった。しかし、時間が足りなくなると、少し早めに進めることや、本当に必要な部分だけをする事等の方法を見つけた。そして、時間通りに行くと嬉しかった。また、時間通りにいかない時や、今の雰囲気では教案通りに進めるのは難しいというような時には、臨機応変に教案を変更しながら授業を行い、それがうまくいったという時もうれしかった。

最後に、これからの抱負を3つにわけて述べる。まず1つ目は時間配分である。教案を作る際は時間配分を考えながら、時間が余りそうだったらという時と、足りなくなりそうだったらという時をしっかりと想定する。さらに、時間の余りが2～3分、5分、10分、時間がおしているのが何分かによって、より細かくなをするのかを決めていきたいと思った。そうすることで、もっと余った時間を有効に使えるようになりたい。2つ目は、フィードバックである。学習者の発言に対し、肯定的フィードバックの種類を増やし、上手に使えるようになりたい。否定的フィードバックは今もあまりできないため、どのようにするのがいいか研究し、使えるようになりたいと思う。フィードバックは直接的に学習者の学習意欲に関係してくるため、大切にしなければならないと思う。また、教えること以外でもフィードバックは使えると思う。これからも日常生活で使える場面があれば心がけて使っていきたい。3つ目は学習者が理解できていないことへの説明である。日本語を説明するのは私にとってとても難しいことであり、事前にたくさんのことを調べていくのだが、それでも説明ができないところ、不十分になってしまうところがある。そこを教師のしっかりとした説明によって、学習者に理解してもらいたいと考える。このレポートで述べたように、多くのことを今年度困惑、戸惑い、嬉しさ、成長を一気に体験することができた。これからどうなるかはわからないが、経験を活かして上を目指し成長していきたいと考えている。